

「デカルソン校長先生と篠崎清次からの贈り物」

北海道函館聾学校 校長 門 眞 義 弘

令和6年度に創立150周年を迎える遺愛学院は、過去の資料を読むと、本校が財政的に苦しい時代、経済的・物的援助を惜しまず、多くの示唆を与えてくれた存在でした。そのことを把握していた私は、御挨拶に伺いたいと考えていました。令和4年4月7日に実施された遺愛女子中学高等学校の入学礼拝式には出席できませんでしたが、翌日の8日に福島基輝校長先生のもとへ御挨拶に伺いました。そこで様々なお話を伺うことができ、貴重な資料があることを教えていただきました。また、福島校長先生はお忙しい方ですが、校長先生がお持ちだった次の資料を、その場で数十枚コピーしてくださいました。その資料や遺愛学院のホームページ、そして事務長さんからいただいた遺愛学院の記念誌の写しなどから、私が知り得たその内容を御紹介します。

【資料】

中根 伸一著「篠崎清次の足跡をたどって 北海道ろう教育の父」（札幌聴力障害者協会、1984）
（※私がいただいたのは、この著作になる前の雑誌に連載された「私の研究ノート」というコーナーの記事を集めたものです。今では雑誌の名前も不明ですが、著作本の内容と同一のものであり、貴重な資料だと認識しています。）

◎ 遺愛学院の4代目校長 デカルソン女史



第4代校長
Miss Augusta Dickerson

デカルソン女史は、アメリカのフィラデルフィア女子師範学校で学んだ後、メソジスト婦人外国伝道教会の宣教師に就任しました。明治23年遺愛女学校の4代目校長に就任し、大正14年に退任するまで36年間の長きにわたって日本の女子教育に尽力された方です。

遺愛学院のホームページには、「遺愛の礎となる「信仰・犠牲・奉仕」の精神は、第4代校長ミス・デカルソンが提唱しました。人間として自分を見直す機会がある時、きっとこの言葉があなたを勇気づけてくれることでしょう。」と記されており、当時の教えを今に伝えています。

いただいた資料には、「…女性解放の土壌に育まれ、又、社会的弱者に対する慈悲なるものが芽生えていくことが手に取るようにわかる。これは特に校長デカルソン女史の教育方針によるところが大であろう。…」 「…デカルソン女史の一番大きな業績は、女子教育と婦人の地位向上もさることながら函館訓盲院に対する物心支援であった。…」と記載されています。

北海道ではじめて、函館で始まった特別支援教育の種は、当時のキリスト教の精神や教えがなくてはならない要因であったことがよく分かります。

◎ 苦しい時代を支えたワドマン院長



Mrs. Mamie Huntress Wadman
明治34年~36年

函館聾学校・函館盲学校の歴史は、創立者であるシャーロット・ピンクニー・ドレパー先生が明治28年10月に創立されたことに始まります。当時は息子の妻、マイライネ・ドレパー先生の働きが大きかったと記録されています。創立時に遺愛学院のデカルソン校長先生は卒業生一人を教師として送り、援助してくれました。明治32年にドレパー先生が函館で亡くなられてから2年間は遺愛学院のデカルソン校長先生を中心に、篤志家の方々による財源で学校を運営していました。J・W・ワドマン宣教師さんが来函され、夫人であるメイム・ハントレス・ワドマン夫人が明治34年に院長として就任（当時38歳）しました。そして、校名を函館訓盲会から函館訓盲院に変更し、明治36年まで勤められました。

◎ 初代校長 篠崎清次の苦悩



初代校長 篠崎清次

明治37年に23歳の若さで初代校長（院長）となった篠崎清次は、創立以来の教師3人に辞職され、院長兼務の多難なスタートだったそうです。

東京に勉強にいった帰郷して間もない清次が行う訓盲院の教育や運営は大変だったと想像できます。ましてや、ろう教育の先進地で

ある東京で教育方法を学んだ清次にとっては、不十分な教育環境におかれている盲ろう児を目の前にして毎日が心の痛むものであったに違いありません。

そこで清次は、この年の12月に意を決して訓盲院のスポンサーであるデカルソン校長先生に直談判にいったそうです。デカルソン校長先生は、スポンサーである米国匿名婦人団体の函館の代表者でした。しかし、その時には、デカルソン校長先生は「…この団体は、教育ということよりもむしろ慈善ということに重きを置き、数の多きを望みます。2、3の盲啞生にてもこれに幸福を興へ得ば、足れる希望ゆえ、せっかくの提案なれど採用しがたき…」と断ったそうです。このように、篠崎が考えた「学校の設備を完全にし、盲啞両生の幸福を増進する案」は簡単には実現できなかったのです。

しかし、清次は決して諦めなかったし、遺愛学院にお世話になったことを忘れませんでした。

◎ 辻本繁の卒業と経営に深くかかわったデカルソン校長



辻本繁（八雲時代）

明治44年10月14日、「啞生部」を設けて以来はじめての卒業式が挙行されました。卒業生は、辻本繁（函館聾学校で、はじめて引き受けた2人のろう児のうちの一人。後の室蘭聾学校の初代校長。）ただ一人だけだったそうです。ただ一人のために、再建されたメソヂスト函館教会礼拝堂で卒業式が行われました。函館訓盲院の経営代表者でもあったデカルソン校長先生がアメリカから戻られた機会に合わせて挙行されたようです。その時にデカルソン校長先生は、辻本繁に記念品として懐中時計を送った記録が残っています。この懐中時計は、「室蘭言泉学園」（辻本が室蘭聾学校と共に建設したろうあ児児童養護施設。）に長い間大切に保管されていたそうです。

辻本は、卒業後明治45年4月に聾啞部教員として採用されています。その年、「函館訓盲院」は「函館盲啞院」と改称されました。

そして、函館盲啞院の経営状況は、徐々に改善していきました。明治44年までの歳費は年間約500円、月にして40円程度でした。これら全てがデカルソン校長先生を通した米国婦人団体からの出資で、一般市民からの寄付や援助は全くありませんでした。しかし、明治45年3月に発足した後援会は、月20円、年額200円程度の歳入増をもたらし、新たに教員を

採用したり、生徒の増加を助けたりしたようです。篠崎清次が、デカルソン校長先生に礼拝堂内で直談判した時から8年もの歳月が流れており、辻本繁の卒業と共に、篠崎清次の教育への思いが花開こうとしていた時期でした。

◎ 今に伝わる遺愛学院への感謝の思い

大正3年に起こった函館大火によって校舎が類焼した際には、盲ろう児教育を空き家で再開しながら再建を急いだようです。繰り返し起こる火災から学び、自らの給料から天引きして保険に加入しており、その保険金が850円出て、再建に充てました。また、デカルソン校長先生から200円、豪商（寺井四郎衛）から100円の援助を得て、馬車鉄道会社の不要となった社屋購入の資金にしました。清次はそのお礼にデカルソン校長先生に篠崎家に代々伝わる家宝の鎧（よろい）と兜（かぶと）と日本刀を寄贈しました。

遺愛学院には、今でもその兜、鎧、日本刀が残されており、見せてもらうことができました。篠崎清次は、遺愛学院への感謝の思いを形に残したかったのです。

しかし、当時、デカルソン校長先生は、キリスト教（メソヂスト）であるため、殺し合いを目的とする武具の処置に困惑したとの記載があります。戦後、剣道に長けた遺愛学院の荒谷校長先生がガラスの箱に収め、校長室に飾りました。荒谷校長先生が弘前の学校に赴任した際、学校の伝統的な行事に参加するため、武具一式を取り寄せ、着用して街を練り歩いたといわれています。



福島校長先生の許可をいただき、川嶋事務長様の御協力で撮影。
（令和6年7月23日）